

Serum uric acid levels and long-term outcomes in chronic kidney disease.

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮岡, 統紀子 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10470/31332 |

主論文の要旨

Serum uric acid levels and long-term outcomes in chronic kidney disease. (慢性腎臓病患者における血清尿酸値と長期予後)

東京女子医科大学大学院
内科系専攻内科学(第四)分野
(指導:新田孝作 教授)
宮岡 統紀子

Heart Vessels. 2014;29:504-512 に掲載

【要 旨】

血清尿酸値は糸球体濾過量の低下に伴い上昇することが多いが、慢性腎臓病(CKD)患者において血清尿酸値と予後および腎機能増悪因子としての関連は明らかにはされていない。CKD 患者における血清尿酸値と長期予後および腎障害の進行との関連性について調査した。CKD stage2-4 の患者 511 人を対象とし、血清尿酸値と全死亡率、心血管死亡率、末期腎不全、糸球体濾過量(eGFR)の50%以上の低下のリスクとの関連を評価した。6年間の観察期間において31人が死亡し、内19人が心血管関連死であった。血清尿酸値と全死亡率、心血管死亡率、末期腎不全、50%以上のeGFRの低下は、いずれも有意な関連を認めなかった。さらに、高尿酸血症群(尿酸値 >7.0 mg/dl もしくはすでにアロプリノール治療を受けている)を正常群と比較した。多変量解析では、性別、喫煙、心血管リスク因子、腎疾患背景因子、アロプリノール服用で調整を行ったところ、全死亡率と心血管死亡率が高尿酸群で有意に高かったが、末期腎不全と50%以上のeGFRの低下のリスクについては有意差を認めなかった。高尿酸血症は血管病変との関連があり、心血管危険因子として予後に関連していると考えられた。高尿酸血症の存在が、CKD stage2-4 の患者において全死亡率、心血管死亡率に關与していることが示された。